

ユハン・エナンデルの歴史記述と「スウェーデン的アメリカニズム」
 〈アメリカ人たること〉のためにスウェーデン語を使用した移民集団の企図について

鈴木俊弘

1 はじめに

歴史家のジョン・ボドナーは、米国の公的記憶の研究に取り組んだ『鎮魂と祝祭のアメリカ』（一九九二）にて、米国内のエスニック集団による祝祭の特質を論じるため個別の分析事例を提示している。彼が採りあげたのは、イリノイ州のスウェーデン系移民、しかも一九世紀のスウェーデンでルター派教会の書物を焚書するなど宗教的に過激な行動によって危険視され、米国に逃れたエリック・ヤンソン主義コミュニティの祝祭であった。米国マイノリティの、さらに極端な少数派の祝祭風景を

叙述するに先だって、ボドナーは米国内におけるスウェーデン系移民の歴史感覚^い一般について「補足」を加えようとする。

もちろんスウェーデン系移民じたいは、すでにアメリカの植民地時代から来ていたが、おおかたのスウェーデン系移民たちは、一八四〇年代に始まる中西部へのスウェーデン系移民の系譜に、自らの直接の血の流れをさかのぼっている。スウェーデン系アメリカ人が自分たちの原点を探るとき、祖先の出身国であるスウェーデンと一九世紀中頃に中西部へ向けてスウェーデンを離れた開拓者を思い浮かべるのである。従っ

て彼らは、必ずしも独立期のアメリカやアメリカを独立に導いた英雄たちを自分たちのアメリカにおける原点とは考えていない⁽¹⁾。

ボドナーの補足は、ケドゥーリからゲルナー、ホプズボウムからトム・ネアン、アンソニー・スミスからベネディクト・アンダーソンまで多様な議論で近代国家における過去への視線が検討され、そこに必然として人為的な契機が付随するとの見解が市民権を得たはずの一九九〇年代の記述としては、ずいぶんと素朴に感じられてしまう。しかしこの一節を安易に読み飛ばすことはできない——一九世紀から二〇世紀の米国中西部に生きたスウェーデン系移民の歴史を追うとき、その文言と語りの形式は、米国内エスニック集団の歴史観をめぐる別なる問題の存在を浮かび上がらせるのだ。その契機となるのは、やはり祝祭の場である。

一九三八年六月二七日、「ニュースウェーデン」と総称されたスウェーデン王国の北米植民地建設三百周年を盛大に記念する式典がデラウェア州ウィルミントンにて開催され、式典開幕の壇に上った合衆国第三二代大統領F・D・ローズヴェルトは祝辞を述べるため自分の血筋について言及した。

私は嬉しいことに、ニュースウェーデン植民地と個人的な縁があるのです。私の祖先ウィリアム・パークマンは、一六五八年から一六六三年までデラウェア河岸のニュースウェーデン植民地の副総督に就いておりました。また私はこの身にスウェーデンの血が流れていることを誇りに思います。私のもうひとりの祖先マルティヌス・ホフマンは、ニューアムステルダムにおける初期のスウェーデン人入植者でした⁽²⁾。

このとき会場をおおった興奮について、速記官ヘンリー・カネは速記録に拍手の印を散りばめながら記録している⁽³⁾。この祝祭は連邦議会により大西洋岸入植三百周年記念祭で唯一の政府主催と定められ、スウェーデン（とフィンランド）から国費を招いて開催された別格の祝祭だったゆえに、米国内のスウェーデン系移民は「われわれスウェーデンの血を引く者たちこそがアメリカの基礎を築いた。〔…その〕貢献を国民に思い出させ、われわれの祖先に栄誉を与え、スウェーデン民族（と、間接的には自分自身）に敬意と喝采をもたらず究極の機会を手に入れなければならない」⁽⁴⁾と訴えて全米規模で結束したからである。もちろん、この大統領の発言は壇上の即興ではなく、少なくとも四種の改稿を経て用意された原稿を正確に読み上げた祝祭戦略であった。一枚の国務省儀典局のメモは、演説起草者たちに

よる周到な演出の経緯をあきらかにしている⁶⁵。

この情景をボドナーの補足と重ね合わせてみると、そこには寓意的絵画のような空間が出現する。「アメリカの植民地時代から来ていた」スウェーデン人がローズヴェルトの姿形で顕現し、「大統領」という共和国の徳目を体現する職能を通じて壇上から祝辞を述べ、「一九世紀中頃に中西部へ向けてスウェーデンを離れた開拓者」の子孫たちが盛大な拍手でそれに応える——明らかに両者はボドナーの補足と正、反対の様態で結びついていた。しかし、スウェーデン史で屈指の女性作家フレドリカ・ブレームルの日記書簡は、この結びつきそのものが史的な問題であることを教示する。一八五〇年六月二五日、米国周遊中のブレームルはウィルミントンで初期のスウェーデン入植者が建立した教会を訪問し、そのときの衝撃を妹へ書き綴った。

わたしは古いスウェーデン教会を訪れました。(……)現在の牧師はクレイ氏で、氏は知るかぎりすべての最初のスウェーデン人入植者の子孫を自邸に招き、わたしに紹介してくれました。五〇人から六〇人ほど集まったでしょうか、握手した大半はとても好感の持てる方たちで、スウェーデンの姓だと判る場合が多かったのですが、その皆さんは姓のほかにスウェーデンのなところなどまるでありませんでした。祖先の

記憶どころか、ことばも、みなりも、何から何までも、いまやこの地で多数者のアングロサクソン人種のなかに消えてしまっていたのです。純粹にスウェーデンらしさを感じたのはただ鐘樓の時計だけでした。(……入植の痕跡は)まったく何も残っていません！ほんとうにすべてが消えてしまっています⁶⁶。

ローズヴェルトの演壇からわずかに離れた教会の、祝祭とほぼ同日の景色のなかでブレームルが発見したのは、合衆国で受け継がれたスウェーデン人入植者の血統と文化ではなく、それらの完全な途絶であったのだ。

では、いったいなぜ／なにを契機として、一九世紀に渡米したスウェーデン系移民たちは、みずからの祖先の記憶をたどろうとするとき、地理的・時間的に断絶した一七世紀大陸東岸の入植者を思い浮かべ、その祝祭を移民全体の榮譽と見なすようになったのだろうか。そこに何者かの意図や活動が介在しているのであれば、その動機はどこから／どのような事情を背景に発生し、何を目的に遂行され、どのような結末を迎えたのだろうか。本論は一九世紀スウェーデン移民の特徴とされた「スウェーデン的アメリカニズム」という心性を手がかりに、これらの疑問に接近する試みである。

2 スウェーデン系移民

——合衆国における小規模な大集団

スウェーデンから米国への移民は、年代と渡航数について他の欧州諸国からの移民と同様の関数曲線を描く。本格的な移民は一九世紀から始まるが、ナポレオン戦争期から一八五〇年代までは総数でも一万人に満たなかった。しかし一八六〇年代より年間の移民数が一万二千人を超えるようになり、スウェーデン大飢饉の一八六八年から一八七一年をひとつの節目として人数は急激に増加し、一八八七年には年間四万六千人以上の出国者を記録した。スウェーデン王国の人口が一八八〇年の時点で四五〇万人程度だったことを考えると、米国行きだけでこの時代に年一%超の王国民が移民として渡航したことになる^⑧。

スウェーデンの北米移民史家ダグ・ブランクは、絶対的人数では小規模なスウェーデンからの移民たちが、まさに当時のスウェーデン本国社会の縮図であったこと、その社会の有していた多様性をそっくり持ち込んでおり、とくに宗教的集団と世俗集団のあいだには深い溝があったことを看過しないよう注意を喚起している^⑨。同じく移民史家ウルフ・ペーボムの統計学的研究によれば、新興宗派、各種学校、職業協同組合、新聞・

雑誌、政治結社など、渡米移民が組織した大小の集団は、一九世紀末までに三千もの数に上るといふ^⑩。このような無秩序的な雑多性のなかで移民たちの共約項となりえたのは、山林や島嶼の村落と都市を問わずスウェーデン国内で圧倒的な多数派宗教であったルター派教会への継続的な信仰心と精神的な求心力であった。

スウェーデンからの移民が多数居住していたシカゴで「スウェーデン移民の父」と称賛されたグスタフ・ウノニウスによって、米国初のフェンノスカンディナヴィア移民向けルター派教会が、一部にエピスコパル派を包含しつつも確立したのは一八四九年のことであった。しかしまもなくして、スウェーデン出身の信徒からスウェーデン人のみを対象とするスウェーデン教会の設立が熱望されていく^⑪。移民たちの要求は、一八六〇年ラーシユ・エスピョルン、トゥーヴェ・ハッセルクイスト、エルランド・カールソンら知的経験の豊かなスウェーデン出身の神学者たちが中心となり、シカゴにスウェーデン教会の北米教会組織として「アウグスターナ教会」が設立されたことで実現される。特徴的なことに、このルター派教会には設立当初から大規模な付属大学と印刷所が併設されていた。

アウグスターナ教会はスウェーデン人移民のための〈正統〉なスウェーデン教会として出発したが、その組織の活動は当初

から特異な両面性をもっていた。それはルター派教会としての本則的な信徒にたいする教務範囲以外では、ルター派という枠組みをまったく顧みない活動がなされ、とくに知的分野においては明らかに従来の教会の範疇を逸脱していた点である。一八六八年にノルウェー出身で教会創設者のひとりであったアウグスト・ウエーナスは趣意書を提出し、併設のアウグスターナ学院がルター派神学を専門的に教授するセミナーであるべきことを訴えた。しかし現実には古典語、文学、歴史学から三角測量技法、植物学、動物学に至るまで、多種多様な学科をスウェーデン語と英語の二言語で教授する総合学院として多くの学生を迎え入れる運営方針が採択された¹¹⁾。教会の指導者たちは渡米移民たちの歴史に大きな関心を向けており、一八六九年には牧師エリック・ノレリウスに教会専属の歴史記述官の任を与え、アウグスターナ教会こそが在米のスウェーデン人移民に関する記録であれば、その信仰や信条の差違を問わず信徒名簿から個人的執筆物まで網羅的に収集・保存する拠点となることを自認していた¹²⁾。さらに新聞・雑誌・書籍の出版事業については、二〇世紀初頭まで宗教・世俗の分野を問わず米国内スウェーデン語出版物の最大の版元として君臨したのである。

いた前歴の反映でもあった。たとえばエスピロンはウプサラ大学で神学の他に数学と天文学を学んだ異色の牧師であり、イリノイ州に散らばるスウェーデン人移民を集めて信徒団を形成する傍ら、かれらの生活記録の調査と収集を行う活動をしており¹³⁾、ハッセルクイストはルター派の教義に精通したルンド大学の神学博士でありながら、シカゴにおいてスウェーデン語による移民向け新聞の発行者として名をはせ、教会設立の一年前には「スウェーデン・ルター派出版協会」を組織していた。とくにハッセルクイストの書誌編集者としての卓越した能力は教会設立および教会の長に就任してからも遺憾なく発揮された。

移民向け情報誌の出版は創立当初からアウグスターナ教会の主任務に位置づけられ、読者の居住地、性別、年齢、知的関心の程度を考慮した数種の新聞と雑誌が出版部から定期的に刊行されていたが、ハッセルクイストが発行を担当した隔週新聞の『郷土』(Hemlandet)は、シカゴを中心として競合する多くのスウェーデン語新聞を押さえて、読者数で米国中西部において最大規模を誇るようになったという¹⁴⁾。

アウグスターナ教会にとって、スウェーデンからの移民の歴史とは、多彩な個人の活動のなから精神的な秩序と集団的な共通性を汲みとるための素材であり、同時に薄い地縁と日常言語の融通性を手がかりに個として緩く凝集しているだけの移民

を（おもにスウェーデンにとって正統的な信仰という面で）統一的なスウェーデン人の集団へ固着させるための手段であり、さらにはその集団性の想像を再帰的に確信するための物証でもあった。歴史素材の収集・教育・出版を正統的なプロテスタント信仰の拠点に一元管理しようとする周到な組織運営は、スウェーデン移民独自の「想像の共同体」を浮上させる所与条件として十分だったのである。のちにグスタフ・ニルソン・スヴァーンは「回顧談」にて、ハッセルクイストが米国で出版されたあらゆる種類の「スウェーデン人の著作」を収集し、逐次スウェーデン王立図書館に収蔵させることを図書館長グスタフ・G・クレミングと約束しており、彼の死後もアウグスターナ教会の周辺者によってその任務が代々引き継がれていったことを明かしている¹⁶。それは教会の初期指導者のあいだでも、すでにスウェーデン王国のスウェーデン人と米合衆国のスウェーデン人との差違が決定的であり、渡米移民がスウェーデン王国のナショナルティ形成とは別の路線を歩み始めた現実への自覚を表していた¹⁶。

3 スウェーデン系アメリカ人

——「ある誤解された人間集団」

それでは、渡米したスウェーデン移民独自の「想像の共同体」とはいかなる存在だったのだろうか。かれら（彼ら・彼女ら）は興味深くも「スウェーデン系アメリカ人」という、およそスウェーデンからの移民を指示する名辞のなかで、もっとも目立たない特別な呼称を与えられており、かれらの特別な文化や歴史についてのメンタリティは同時代の知識人たちから「スウェーデン的アメリカニズム」(svenskamerikanism) と総称された。それはつねに「スウェーデン人であること」(svenskhet) と比較対照される心の持ち方として立ち現れたが、スウェーデン王国のスウェーデン人たちがその微妙な語感を知るのは二〇世紀をしばらく過ぎた後だったという¹⁷。

一九世紀末に「スウェーデン系アメリカ人」を代表するジャーナリスト・作家として活躍したユハン・ペルションは、かれらについて『スウェーデン系アメリカ人の研究』(一九〇〇)と題した書籍を出版し、その冒頭に「ある誤解された人間集団」(Ett missförstått folk) と題して米国のスウェーデン移民とは何者であるのかを説明しようとする。

独自の言語、慣習と記憶をもって、アメリカに新しい人間集団が現れた（……かれら）スウェーデン系アメリカ人たちは、スウェーデン人でもなければアメリカ人でもなく、両者の特

性の混合体である。「……」スウェーデン系アメリカ人は、両者とよく似ているが、そのどちらとも異なるのだ¹⁸⁾。

興味深いのは、この移民たちを説明する語り口自体が、すでにクレヴークールが『アメリカ農夫から手紙』(一七八二)のなかで「アメリカ人とは何者であるのか」を説明する決定的な一節を利用しながら、自分を語るための形式として引き受けている点である。この特徴はまさに「スウェーデン的アメリカニズム」のもっとも重要な点でありつづけた——それは合衆国のアングロサクソンの歴史文脈ですでに確立した〈史実〉あるいは〈語り〉の形式のうえに、スウェーデン的な要素をプリコロラージュする技法である¹⁹⁾。

そもそも「スウェーデン系アメリカ人」とは、現在のわれわれが考えているほどに自然発生的な呼称ではなかった。もちろん一九世紀移民の最初期に渡米したスウェーデン移民を呼称するときにも「スウェーデン系アメリカ人」という用語は広く用いられたが、それは例えば「スウェーデン系共和国人」のような〈オルタナティヴ〉のなかで取捨選択された結果として流通していたのである。呼称についてのオルタナティヴの存在は、もっとも自然に感じられる用語法にも、ある種のイデオロギー性が内在していることを教えてくれる。この「スウェーデン系

共和国人」とは、イリノイ州の反ルター派新聞の名称『北米のスウェーデン系共和国人』(*Den svenske republikanen i Norma Amerika*)に使用されたように、スウェーデン的な伝統を否定する〈新しさ〉を前景化した移民呼称であり、同様に「スウェーデン系アメリカ人」という呼称には、いまだスウェーデン教会への信仰を含むスウェーデン本国との価値観的な連帯が暗黙の了解とされていたのである。ゆえに留意しなければならぬのは、一九世紀の大規模移民期において「スウェーデン系アメリカ人」とは、「スウェーデン系アメリカ人」、すなわち「アメリカ人となること」が「スウェーデン人であること」について言及される過程から再帰的に認知される用語法だった点である。だからこそ「スウェーデン系アメリカ人」とは、どのような内実の者たちなのかを模索する一連の知的活動は、米合衆国内でもっとも「スウェーデン的」と見なされた因子のなかから萌芽することになった——一九世紀のスウェーデン移民がもっとも多く居住する中西部において、もっとも伝統的な信仰と知識の拠点となったアウグスターナ教会の内部で、もっともスウェーデン系読者数の多いスウェーデン語新聞を編集し、ただひたすらスウェーデン語のみで書き語り、英語の使用を死ぬまで拒絶した、もっとも〈移民〉という存在に似つかわしくないスウェーデン人、ユハン・アルフレド・エナンデルである。

4 エナンデルの歴史記述と 「スウェーデン的アメリカニズム」

エナンデルは一八四二年にスウェーデン中西部の森林地帯に孤立した村ヘルヤに生まれた。両親は豊かでない農民だったため、聖書とわずかな信徒向け宗教書以外の書物に接することができず、若きエナンデルは教育を受ける機会をもとめて両親を説得し続け、ようやくイエーテポリから北東一三〇キロメートルに位置する小都市スカラの基礎学校に通うことができた。そこで教師に学才を見いだされたエナンデルは、級友から妬まれたりも来る日も「小説」を読みふけたという。とくに古ノルドの男たちの冒険譚に心を躍らせることで〈歴史〉に魅了されたエナンデルは、シラーやヴォルテールの他に、ひそかにルナンの愛読者であったことを告白している。一八六九年にスウェーデンの中等学校ウエネルシュポリ・アカデミを卒業したエナンデルは、アウグスターナ学院に進学するために渡米したが、そこでハッセルクィストに文才を見込まれ『郷土』紙の編集者として雇われることになった。途中同学院で教鞭を振るい、在コペンハーゲンの米国大使に指名された時期もあったが、その

後エナンデルは三四年もの長きにわたって『郷土』紙の発行に携わり続けており、一時期はアウグスターナ教会の幼年誌から時事評論誌まで数種のスウェーデン語雑誌の発行も同時に手がけていた²⁰⁾。

アウグスターナ教会の有能な編集者として出発したエナンデルは、すぐさま驚くべき文量の歴史著述家として移民たちに知られるようになり、のちに「スウェーデン系アメリカ」で最高の演説家として記憶された。教会の外部とりわけ中西部地域でエナンデルの名声を確認したのは、彼が米国生活を開始してわずか五年目の一八七四年から半自費（新聞発行人のG・A・ボーマンと印刷工房を共同設立）によって出版を開始し、続く六年で全四巻に及ぶ大著作となった全編スウェーデン語による『アメリカ在住スウェーデン人のための合衆国史』（以下『合衆国史』と略称）の刊行である²¹⁾。それはスウェーデン移民としてはじめて〈アメリカ史〉の歴史記述であったのと同時に、さらには当時〈アメリカ史〉について出版されたいかなる歴史書とも完全に異なる視点から記された孤高の〈歴史記述〉であった。その第一巻は北米大陸の先住民たちについての博物誌的な記述とレイフ・エリクソンの「ヴァインランド」発見からノルド人の入植およびその崩壊に焦点を合わせた九八六年から一三四七年まで、第二巻は米大陸ではなく、あくまで「大西洋横断航

路」が発見された一四九二年からジェイムズタウン建設の一六〇七年までが語られた。さらに第三巻は合衆国独立一三州の基礎と発展を描いた一六〇七年から一六八九年、そして最終第四巻は独立戦争前夜から「現在」に値する一七六三年から一八八一年までが綴られた『合衆国史』という題名に恥じない壮大な歴史叙述である。この時点で出版されていたスウェーデン移民による歴史書は、ルター派信徒の信仰生活史、スウェーデン移民集団の入植した地域の郷土史、また自伝的著作ばかりであり、エナンデルの著作はその存在自体が驚愕すべき特異点であった。

エナンデルは、この大著執筆の直接的な動機として一八七六年の米独立百周年記念祭を挙げていた。つまり、スウェーデン系の人びとにとって〈忘れ去られた歴史〉を思い出させることで、この祝祭においてスウェーデンからの移民が傍観者ではなく参与主体であることを自覚させる意図をはっきりと掲げていたのである。第一巻ではコロンブスの西方航海譚に五百年も先立つ歴史を描くことで、北米大陸の発見者がノルドの民であることを知らしめ、合衆国の起源を『グリーンランド人のサガ』に記されたヴィンランド植民伝説に直結させ、第二巻ではコロンブスの軌跡を大西洋航海者として限定し、第三巻では一七世紀のスウェーデン王国によるデラウェア河流域への入植事業を「プリマス植民地建設」と同等の偉業であると讃え、第四巻で

は合衆国独立宣言に署名したジョン・モートンと独立戦争期の大陸会議代表ジョン・ハンソンを「合衆国初代大統領」として顕彰し、合衆国建国の精神を「スウェーデン人」の自由を愛する気風の産物と見なす——それは「われらがスウェーデンの父祖たちの英雄的な過去の記憶が永遠に消えること無きよう、そして他の誰よりも誇らしい父祖たちの美徳が、このアメリカの地に生きるスカンディナヴィアのノルドの民の子孫のなかで未来にわたって欠けることなど無きよう」²²願うての壮大な企図であった。

しかし、この『合衆国史』で展開されたエナンデルの〈歴史記述〉にたいする評価は、しばしば米独立百周年記念祭に便乗した過度な祖先崇拜と自民族中心主義の発露として否定的である。たとえばベイボムをはじめとするスウェーデン本国の移民史研究は、エナンデルがたびたび「アーリア人種」の神話的言説に言及している点に着目し、その後の祝祭への積極的な姿勢と合わせ彼個人の人種主義的な歴史観が滲出した著述と評する傾向が強い²³。また米国におけるスウェーデン移民史研究の第一人者であるアーノルド・バートンも、エナンデルの記述形式じたいが「ルードベック的ロマン主義」に集約される一九世紀スウェーデン・ナショナリズムの演奏文体であると評している²⁴。

しかしここで筆者が指摘したいのは、エナンデルの盲目的な祖先崇拜と捉えられがちな記述方法こそ、一九世紀末に浮上した「スウェーデン的アメリカニズム」の具体的発露に他ならぬとの仮説である。エナンデルの『グリーンランド人のサガ』的な歴史観への傾倒——彼は西インド諸島を発見する航海でさえ、コロンブスが一四七七年にアイスランドを訪れ、ヴィンランドの存在を聞いたことが契機と断定している——は、のちの演説や著作に数多く表出していたが、もっとも率直な主張を含んだ記述は『アメリカにおけるノルド人、あるいはアメリカの発見について』（一八九三）で披露された。この著作は副題から「シカゴのコロンブス記念祭一八九二—一八九三開催についての歴史的反論」であることが掲げられ、最終頁にて「いまやコロンブス熱がアメリカ全土を覆っており、その『二番手の発見』の榮譽を褒め称えているが（……）それはいわば歴史への裏切りといえまいか」²⁶と結論を出し記念祭の不当さを訴えている。しかしブランクの研究によれば、エナンデルが見据えているのは純粹な歴史風景ではなく、「シカゴの移民勢力図の変化」であったという²⁷。つまりコロンブスへの過度な顕彰に疑問をつきつけることは、一九世紀末のシカゴで急速に存在感を増したイタリア系移民集団への文化的な抵抗であり、米国社会への同化が鈍いカトリック教徒たちへの「プロテスタント的」

な反発の表明でもあったのだ²⁸。「この偉大なる共和国において、スウェーデンの息子と娘たちほど良き市民となる移民は世界の何処をさがしても存在しないことがアメリカでの定説」²⁹であると思われて疑わなかった「スウェーデン系アメリカ人」にとって、ノルド人の伝説に米合衆国の前史を接ぎ木することは安易な祖先崇拜の発露ではなく、むしろ当時の社会に支配的なアングロサクソンの歴史、さらにはプロテスタント信仰を中心とした精神史への帰順を意味していた。エナンデルから端を発した「新起源」の主張は³⁰、すぐにスウェーデン系移民にとって米国社会にみずからの存在をアピールする恰好のビジュアル・アイコンとして定着し、シカゴのコロンブス記念祭に参加した「スウェーデン系アメリカ人」たちは、一〇世紀のヴァイキング船を模した山車やワルキューレの衣装に扮した少女たちをパレードで練り歩かせ、「コロンブスのための祝祭」見物に集まった大群衆から喝采を浴びていたのである³¹。

5 祝祭の修辭——言説の起源

このような解釈の仮説枠にもっとも合致するのが、一八八八年にミネソタ州ミネアポリスで開催されたデラウェア河流域初の白人入植を「史上初めて」記念する「ニュー・スウェーデン二

五〇周年記念祭」の祝祭光景であろう。デラウェア州やペンシルヴェニア州の郷土史のなかには、「新スウェーデン」(Nova Suecia)という名の一六三八年から一六五五年の一七年間だけデラウェア河畔にひろがった小植民地に関する歴史が細々と伝えられていた。しかし前者は合衆国最古の州邦の成立史を彩る逸話のひとつとして、後者は地域の英雄として讃えられたウィリアム・ペンの入植にあたって、その一行を手招きする脇役的な歴史語りより外に出たことはなかった³¹⁾。このニュースウェーデン二五〇周年記念祭こそ、「スウェーデン系アメリカ人」に「自分たちの原点を探るとき、祖先の出身国であるスウェーデンと一九世紀中頃に中西部へ向けてスウェーデンを離れた開拓者を思い浮かべるのではなく、独立期のアメリカやアメリカを独立に導いた英雄たちを自分たちのアメリカにおける原点と考える」ようになる直接的契機を提供した祝祭であった。ミネアポリスの会場には一万五千人あまりの「スウェーデン系アメリカ人」が詰めかけ、米国中西部のエスニック集団主催の式典としては異例の規模となった³²⁾。

式典開幕には地域の有力者たちが次々と演壇に上がり、それぞれ様に「東海岸のスウェーデン人の偉業」を讃えていったが、かれらが用いる言祝ぎは、どれもほとんど反芻的といえるまでに、エナンドルの提示した歴史の語りを敷衍していた。ミ

ネソタ州務長官ハンス・マトソンが開会の辞として「ニューイングランドへ渡ったビルグリム一行、中部地域へ渡ったオランダ人、スウェーデン人、クウェーカー教徒、南部へ渡った英国騎兵、スコットランドのハイランダーズ、フランスのユグノー」というように東海岸の入植集団を北部から南部へ列挙しながら独立一三州の心象地図を描き、「かれらが組み合わさり、混ざり合うことで(……)世界でもっとも偉大な国家と最高の文明が完成したのです³³⁾」と合衆国の成立を讃えてみせると、駐スウェーデン大使のウィリアム・W・トマスは、「たしかに自由と愛国心、建国の決意と勇気をアメリカの地にもたらしたのは、メイフラワー号ばかりではありません。スウェーデンのカルマール・ニュッケル号も同様です」と述べ、ビルグリム・ファーザーズの歴史的徳目にスウェーデン入植者のそれを比肩させ、しかるのちに奴隷制へ言及しはじめた。

スウェーデン王の意図によって、この入植地は抑圧されたあらゆる国民の庇護地となりました。そこは自由の国家であり、すべての住民は平等の権利を有し、みずからの労働によって得られた果実のみずからが十全に享受していた地だったのです。植民地の内側に奴隷制はありませんでしたが、それはグスタヴス王みずからが「奴隷とは莫大な費用に見合わない。

労働は遅々として進まず、酷使すればすぐに倒れ死ぬ」と述べていたからです。なんて賢明な言葉でしょうか！もしアメリカがこのような啓蒙的な政策をニュースウェーデンの入植者たちから受け継いでいたのならば、われわれは南北戦争で筆舌に尽くしがたい人的被害と経済的損失を被らずにすんだでしょうに³⁴。

エナンデルはニュースウェーデンの歴史を記すとき、ことあるごとにグスタヴス・アドルフスの「奴隷なしの自由な労働」(Fritt arbete, ingen slaf) というキャッチフレーズを提示しながら、それがアメリカ北部の〈自由労働〉観を思い起こさせるよう巧妙な修辭的誘導を行っていた³⁵。その修辭は本来の王の言葉がもっていた「バルト海沿岸地域での農民身分の保障」という特定の地域の特定の時間にだけ有効だった文脈から離脱し、南北戦争後の南部再建に奔走する合衆国社会の現在進行的な政治状況に的確に合致するように伝播したあと、「スウェーデン系アメリカ人」の歴史がアメリカ北部の道徳観との系譜性を有していることを、非「スウェーデン系アメリカ人」の言葉を經由して「スウェーデン系アメリカ人」の聴衆に知らしめるように再帰したのである——「スウェーデン系アメリカ人」の〈忘れ去られた歴史〉は、いちど合衆国のアングロサクソンの社

会的あるいは歴史的文脈で確立している〈言説〉の形式を經由することで、あらためて「スウェーデン系アメリカ人」のものとなるのだ。

この祝祭の会場にはもちろん、以上のような歴史解釈を提示した張本人であるエナンデルも来賓として招かれ演説を披露している。しかしエナンデルは「過度な祖先崇拜と自民族中心主義の発露」と受け取られかねない主張の一切は他の演説者に肩代わりさせ、祝祭の壇上から聴衆に向けて一七世紀植民船団の上陸風景を詩情豊かにスウェーデン語で語りかけた。

一六三八年も三月のなかばになりました。美しいデラウェアのゆるやかな河岸と漆黒の水流のうえに夕闇の霧が覆っています。周囲は春の気配が満ちて緑の絹衣が広がり、いまだリンネが名を与えぬ幾多の色に彩られた花々が咲き乱れているのです。河辺には背の高いインディアンの少年が槍に寄りかかりながら、絵のように美しい風景にしきりに視線をむけています。突然、少年は跳びあがりました。彼のするどい耳が河向こうから迫ってくる聞き慣れない音をとらえたのです。少年は手を眉のうえにかざし、鷹のような眼光を夕霧の向こう側に突き刺しました。彼はブロンズ像のように止まり立ち、時だけが過ぎゆきました。そしてえいと人の背丈ほどの河

草のなかに稲光のように分け入っていきます。まもなくして二艘の帆船が河に姿を顕しました³⁶。(傍点引用者)

絵画のように色彩豊かで異国情緒に満ちた自然描写に、当時「スウェーデン系アメリカ人」たちの文化アイコンとして担ぎ上げられた〈世界史上の偉人〉リンネ³⁷の博物誌的なまなざしを介入させることで、「インディアン少年」を含む情景のすべてをスウェーデン的にドメスティック化した後に、船から下りてきた〈スウェーデンからの巡礼父祖〉の姿を「懸命に働き、きまじめで、自立心にあふれた壮健な農民たち、職人たち」と表現し、米国の共和国市民の理想像と合致する人物として讃え始めた。それは聴衆たるスウェーデン移民たちが米国社会で要請されていた〈アメリカナイゼーション〉の完成像でもあったが、エナンデルはかれらの父祖が共和国成立以前から、すでに理想を〈先取り〉した者たちとして描写した。

このような事例から推察しうるのは、エナンデルが歴史記述で展開したプラグマティックな修辭戦略である。彼の提示した「スウェーデン系アメリカ人」への歴史とは、ただひたすら教条的な視点を他者に強制するような代物ではない。社会の指導者的な階層あるいは知識人にたいしては、米国社会に流通している支配的な歴史物語の骨子にまわりつき、それに同化する

ような含意を十全に想起しえるように、また移民者の大多数にたいしては、歴史叙述のなかでしか語りえない祖先の姿を、自身自身の双対のごとく敬愛できる存在として感じられるよう仕組んだ巧妙な歴史修辭の寄木細工と呼びうる作品だった。その修辭は一九世紀米合衆国の中西部地域から世界に向けて発信しうる普遍性とシカゴを中心とした中西部の都市という局地的な空間のなかでもっとも強力に作用する(純粹にフーコー的な意味での)言説性も兼ね備えていた——だからこそ奇妙なのは、エナンデルの著述すべてが徹底的にスウェーデン語で記された事実である。

6 おわりに——〈アメリカ人たること〉のために

スウェーデン語で記す企図

「アメリカ人」あるいは「アメリカ史」として何の冠語も伏せられることなく支配的に流通する普遍的な社会文化領域にたいし、その社会で普遍語の地位を堅持する英語ではなく、スウェーデン語という極めて限定的にしか流通し得ない言語を用いて接近する行為がどのような意味を持つのかを探ることは、「スウェーデン的アメリカニズム」を理解するための重要な課題である。ただしスウェーデン語で記す行為を、移民とその出身国

民との紐帯を証明する安易な指標としてのみ処理することは難しい。エナンデルは死の直前に自分の業績を振り返り、アウグスターナ教会の仲間たちにむかって、このように断言しているからである。

わたしがこれまで苦心し働いてきたことのすべては、スウェーデン人たること (svensket) のためではなく、スウェーデン系アメリカ人たること (svenskanerikanism) のためでした¹³⁶⁾。

ここで彼の〈遺言〉に重ね合わせたいのは、当時「スウェーデン系アメリカ人」の置かれていた言語使用の環境である。米中西部のスウェーデン系移民のあいだでは世紀転換期より英語の使用が常態化し、スウェーデン語を維持する意義が言語問題として浮上していた¹³⁷⁾。アウグスターナ学院初の「米国生まれ」の長として一九〇一年から第四代学院長に就任したグスタヴ・アンドレーン¹³⁸⁾は、ストックホルムにて『アメリカにおけるスウェーデン語』(一九〇〇)を出版し、米国でスウェーデン語は存続するか否かを問うた。アンドレーンは状況を分析する限りスウェーデン系移民集団のなかでも「長期的には英語があらゆる場面で浸透し〔……〕遅かれ早かれスウェーデン語の使

用は消失するだろう¹³⁹⁾」との結論を出さざるを得なかった。その三〇年後、一九三〇年に実施された合衆国第一五回センサスにて、初めて移民出身国別に英語使用の可否が調査されたが、一〇才以上のスウェーデン出身者のうち、英語を解さない者の割合は一・五%にとどまり、とくに就労などで公的な場に赴きやすい男性では、その割合が一%にまで下がることが判明する¹⁴⁰⁾。スウェーデン系移民にとって英語の習得が「アメリカ人たること」を獲得する条件にならなくなったとき、スウェーデン系移民は、むしろ米国でスウェーデン語を使用しつづけることの意味について議論を深化させた。ミネソタ大学のスカンディナヴィア語教授ユハン・カールソンは『われらはなぜアメリカでスウェーデン語を守り、はぐくみ、用いなければならないのか』(一九二二)のなかで「みづからが生まれ育った故郷を去ったとたんに、父母とその家をすぐさま、何の喪失感もなく忘れ去ってしまうような人間が、完全に正常な人間であるといえるだろうか¹⁴¹⁾」と主張してスウェーデン語の無自覚な放棄を戒めつつ、スウェーデン語使用の意義について「多言語を使用する集団は、知性に富んだ集団となるにもっとも適した環境に置かれている。もし言語が死に絶えるさまを放置するならば、アメリカはその言語によって扉が開かれるべき知的な財産の取得手段を確実に失うことになる¹⁴²⁾」と断言し知識人の支持を集

めた。すなわち、米国におけるスウェーデン語の役割について、スウェーデンへの親愛を涵養・展開する媒材^{メディア}ではなく、かれらが合衆国に資する文化を米社会に伝播する導体^{コンダクター}と位置づけたのである。

大移民時代においては、スウェーデン語こそがスウェーデン系移民を合衆国内の確固たるエスニック集団として凝集させるとともに、かれらを「アメリカ人」とならしめるための文化経路として機能した局面が存在した。ならばエナンデルのスウェーデン語による膨大な歴史記述とは、スウェーデン語を経由することではか到達できない「アメリカ史」の財産を相続し、それを次代に媒介するプロセスの総体であり、彼が生涯をもって恭順した「スウェーデン的アメリカニズム」とは、スウェーデン語を駆使する意義を自覚することで、スウェーデン系移民がたんに支配的文化に従属する意味ではない「アメリカナイゼーション」を果たすこと、米国社会での市民的普遍性を獲得した十全な「アメリカ人」になることに向けられた特異な企図だったと考えられよう。

たしかにそれは完全なる成功を収めたと評したい。植民地期

入植活動から独立革命期に活躍した「スウェーデン人」までの歴史を同一の系譜のなかに言及ぐエナンデルの歴史語りは、学生時代にエナンデルの歴史講座に出席して深い感銘を受け、ニューヨークスウェーデン史の研究を決意した歴史学者アマングス・ジョンソン博士の英語著作群に引き継がれた。それらは一九三六年以降デラウェア河流域入植記念祝祭の連邦議会決議に幾度も付帯資料として指定され、米国の「公式史」としての地位を獲得することになる⁴⁴。エナンデル的な歴史語りの延長線上で合衆国大統領はみずからの血統を「スウェーデン人」であると明かし、移民たちは祝祭に熱狂した。その姿は同時代の歴史家から好ましがらざる祖先崇拜と批判されることはあっても⁴⁵、その崇拜の様子が墓石⁴⁶と失笑されることはなかったのである。エナンデルが心血を注いだ「スウェーデン的アメリカニズム」の著作群⁴⁷は、あまりに局地的・局時代的なスウェーデン語記述ゆえに後代に読み継がれることはなかったが、だからこそ、完璧な「消滅する媒介者」として、スウェーデン系移民全体の知的生活の深層に強い影響力を發揮したのだった。

- (一) John Bodnar, *Remaking America: Public Memory, Commemoration, and Patriotism in the Twentieth Century* (New Jersey: Princeton University Press, 1992), 44.
- (二) "Address of the President at the Tercentenary Celebration Fort Christina Park, Wilmington, Delaware June 27, 1938, 10:00 A.M.," Official Folder (OF): 1139, Franklin Delano Roosevelt Library (FDR Lib.), Hyde Park, New York.
- (三) Statements File for "Address of the President at the Tercentenary Celebration Fort Christina Park, Wilmington, Delaware, June 27, 1938, 10:00 A.M.," Shorthand by Kannee, OF: 1139, FDR Lib.
- (四) Swedish American Tercentenary Association, "To the Officers and Individual Members of all Organizations in the St. Paul-Minneapolis Area, Having Interests in Matters Swedish-American" n. d. stored at American Swedish Institute.
- (五) "Delaware Valley Tercentenary. Information from Judge Moore, Counselor, Department of State," n. d., OF: 2242, FDR Lib.
- (六) Fredrika Bremer, *Hemmen i den Nya världen. En dagbok i bryf, skrifna under toenne års resor i Norra Amerika och på Cuba. Andra delen* (Stockholm: P. A. Norstedt & Söner, 1853), 15-16.
- (七) Bo G. Järnstedt, "Swedish Immigration to the United States in the Last Hundred Years and Its Importance for Swedish American Relations," *Swedish Pioneer Historical Quarterly* 12 (1960): 73-75; Lars Ljungmark and Sveriges radio aktiebolag, *Den stora utvandringen. Svensk emigration till USA 1840-1925* (Stockholm: Sveriges Radio, 1965), 179-180.
- (八) Dag Blanck, "History and Ethnicity: The Case of the Swedish Americans," *Swedish-American Historical Quarterly* 46 (1995): 59.
- (九) Ulf Beijbom, "Swedish American Organizational Life," in *Scandinavia Overseas: Patterns of Cultural Transformation in North America and Australia*, eds. Harald Rumbom and Dag Blanck (Uppsala: Centre for Multiethnic Research, Uppsala University, 1990), 63-66.
- (一〇) Ulf Beijbom, *Suedes in Chicago: A Demographic and Social Study of the 1846-1880 Immigration* (Stockholm: Läromedelsförlagen, 1971), 51-52.
- (一一) Conrad Bergendoff, "An Ancient Culture in a New Land," *Swedish Pioneer Historical Quarterly* 27 (1976): 130.
- (一二) Ulf Beijbom, "The Historiography of Swedish America," *Swedish Pioneer Historical Quarterly* 31 (1980): 259.
- (一三) Bergendoff, "An Ancient Culture," 127.
- (一四) Ulf Beijbom, "The Printed Word in a Nineteenth Century Immigrant Colony: The Role of the Ethnic Press in Chicago's Swede Town," *Swedish Pioneer Historical Quarterly* 28 (1977): 83.
- (一五) Gustav N. Swan, "En återblick," *Yearbook of the Swedish Historical Society of America* 5 (1914-1915): 38-54.

- (16) Gunilla Larsson and Eva Tedemnyr. "The Royal Library and Swedish-American Imprints." *Swedish-American Historical Quarterly* 43 (1992): 179-183. スウェーデン王立図書館とメソヂスターナ教会との通信書簡が明らかにするものは、大西洋を挟んだ〈スウェーデン人〉たちの「出版物」にたいする認識の温度差である。王立図書館の司書たちは北米大陸の出版物を在外スウェーデン人による外国出版と把握し、その収蔵を「あらゆるスウェーデン語の書物を図書館に所有すべし」との図書館を遵守する一環と認識していた。しかしハッセルクイストから代々引き継がれた「無報酬の収集者」たちは、スウェーデン移民たちの住むアメリカ、すなわち〈スウェーデン系アメリカ〉から送付される出版物と目録が、スウェーデン王国と〈スウェーデン系アメリカ〉とを繋ぐ臍帯の血液にあたるものと考えており、見返りとして王立図書館へ正統的に収蔵された書籍を米国内に「逆送付」するよう絶えず求め続けたという。その実らぬ文言からは、かれらの抱いていたある種の「恐れ」——〈スウェーデン系アメリカ〉の出版物がスウェーデン王国のそれとは本質的に異質であることへの危惧を読み取れる。
- (17) Bejborn. "Historiography of Swedish America." 283. ベイホームの指摘によれば、スウェーデン本国にこの概念がはじめて本格的に紹介されたのは、ようやく一九一七年のことだった。
- (18) Johan Persson. *Svensk-Amerikanska Studier* (Rock Island, Ill.: Augustana Book Concern, 1912), 9-10.
- (19) 本論で用いる「アングロサクソンの」という表現は、R・ホーマンが使用した人種論的アングロサクソニズムの議論を念頭に置いている。ホーマンによれば、アングロサクソニズムの意味は、「一八四〇年代までに共和国各制度の発展を史的に理解

する視点を提供した概念用語から、自己統治の能力を生来的に備えた唯一の人類としてインディアン・サクソンの優越性を誇示する本質主義的な定義へ変化していった」とする。Reginald Horsman, *Race and Manifest Destiny: The Origins of American Racial Anglo-Saxonism* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1981), 62-77.

- (20) エナンデルには伝記が存在しないため、記述は一八六九年にエナンデルが披露したウエナスホリ・アカデミの卒業講演原稿とC・ヘルイマンフにやる解説を参照した。Conrad Bergendoff. "A Significant Enander Document." *Swedish Pioneer Historical Quarterly* 21 (1970): 3-25.

- (21) Johan A. Enander. *Förening staternas historia. Utarb. för den Svenska befolkningen i Amerika* (Chicago: Enander & Bohman, 1874 [vol. 1], 1875 [vol. 2], 1887 [vol. 3], 1880 [vol. 4]).

- (22) *Ibid.*, vol. 1, viii.

- (23) Bejborn. "Historiography of Swedish America." 264.

- (24) Hildor Arnold Barton. *A Folk Divided: Homeland Swedes and Swedish Americans, 1840-1940* (Carbondale, Ill.: Southern Illinois University Press, 1994), 64. 「ルーヴェック的ロマン主義」とは「医学・解剖学・植物学者にして歴史家を自負したウーロン・ルーヴェック父(一六三〇—一七〇二)が大著『アトランティス、またの名をペンタニム』(一六七九—一七〇二)にて、プラトンのアトランティス王国とはスウェーデンの地を指し、あらゆる文化言語と西洋文明の源であると唱えた学説と、一九世紀のナショナルリズムの時代にその説を依拠し擁護する愛国主義言説の系譜を指す。

- (25) Johan A. Enander. *Nordmännen i Amerika, eller, Amerikas upphöckt. Historisk afhandling med anledning af Columbussterna i Chicago 1892-1893* (Rock Island, Ill.: Lutheran Augusta Book Concern, 1893), 66.
- (26) Blanck. "History and Ethnicity," 64.
- (27) Bénédicte Deschamps. "Italian-Americans and Columbus Day: A Quest for Consensus between National and Group Identities, 1840-1910," in *Celebrating Ethnicity and Nation: American Festive Culture from the Revolution to the Early 20th Century*, eds. Jürgen Heideking, Genevieve Fabre and Kai Dreisbach (New York: Berghahn Books, 2001), 124-139.
- (28) "Address of Hon. W. W. Thomas, Jr., of Maine," in *250th Anniversary of the First Swedish Settlement in America, Sep., 14th, 1888*, ed. Hans Mattson (Minneapolis: n. p., 1888), 12.
- (29) エナンデルの著作の一〇世紀のノルド人植民を合衆国起源と考へる一九世紀歴史観の系譜をひもといてみた。Daron W. Olson. "Norwegian-American Historians and the Creation of an Ethnic Identity," *Scandinavia Studies* 79 (2007): 43-47.
- (30) Dag Blanck. "Swedish Americans and the 1893 Columbian Exposition," in *Swedish American Life in Chicago: Cultural and Urban Aspects of an Immigrant People, 1850-1930*, ed. Philip Anderson and Dag Blanck (Urbana, Ill.: University of Illinois Press, 1992), 289.
- (31) Armandus Johnson. *The Swedish Settlements on the Delaware, 1638-1664*, vol. 1 (Philadelphia: Swedish Colonial Society, 1911), 164-247. エナンデルの著述に米国のワシントン・ペンシルベニアの移住を扱った部分を知ることが出来る。エナンデルのワシントン移住の歴史記述に啓発されたアンマヌス・ジョンソンの研究については難し。
- (32) Alfred Söderström. *Minneapolis minnen. Kulturhistorisk axblockning från kvarnstanen vid Mississippi* (Minneapolis: s. n., 1899), 319. "ネンタの郷土史家だ。" "ローレンス・トーマス" の日の様子に驚嘆し、「アメリカで、このやうに州規模でスウェーデン人の日が祝われたことはかつてなく」と日記に綴る。
- (33) "The Celebration," in *250th Anniversary*, 4.
- (34) *Ibid.*, 7.
- (35) *Ibid.*, 26.
- (36) Johan Alfred Enander. "De förste svenske kolonisterna i Amerika. Tal, hållet i Minneapolis, Minn., den 14 sept. 1888," in *Valda skrifter* (Chicago: A. Harling, 1892), 32-33.
- (37) 一八九一年シカゴのリンカン公園に巨大なリンネ像が建立されたが、それはドイツ系移民におけるシラー、イタリア系移民におけるロロンブスのやうに、シカゴのスウェーデン移民の勢力を顕示して機能した。Eric Johannesson. "The Rower King in the American Republic: The Linnaeus Statue in Chicago, 1891," in *Swedish American Life in Chicago*, 269-72.
- (38) Anders Schön. "Dr. Johan A. Enander: En minnesruna," *Präriehömmen* (1911): 45.
- (39) Sture Lindmark. *Swedish America, 1914-1932: Studies in Ethnicity with Emphasis on Illinois and Minnesota* (Stockholm: Läromedelsförlaget, 1971), 191-218; Barton, *A Folk Divided*, 302-328.
- (40) Gustav A. Andreen. *Det Svenska språket i Amerika* (Stock-

- holm: Albert Bonnier, 1900), 17-18.
- (17) Fifteenth Census of the United States, 1930: Population, vol. II, General Report, Statistics by Subject, 1347.
- (18) Johan Sven Carlsson, *Harjör böra vi bibehålla och värda och bruka svenska språket i Amerika?* (Minneapolis: Folkladet Publishing Company, 1923), 17.
- (19) *Ibid.*, 19.
- (20) Public Resolution, no. 91, 74th Congress (S. J. Res. 231): Public

Resolution, no. 102, 74th Congress (H. J. Res. 499): "First Permanent Settlement in Delaware River Valley." Report to accompany S. J. Res. 135, 75th Congress 1st Session, Report no. 1391.

- (21) Edward N. Saveth, *American Historians and European Immigrants, 1875-1925* (New York: Russell & Russell, 1948), 202-215.

(22) 言語社会 第7号